

# 「書く」活動は発話の産出にどう反映するか —発話量と語彙の広がり度の計量的分析—

村田 裕美子(ミュンヘン大学)

## 研究課題

■ 同じ課題で「話す」活動を2回行ったとき、1回目と2回目の間に「書く」活動(作文)がある場合(実験群)と「書く」活動(作文)がない場合(統制群)とで、2回の発話の量と内容にどのような変化が生じるかを比較分析する。

## 結果の概要

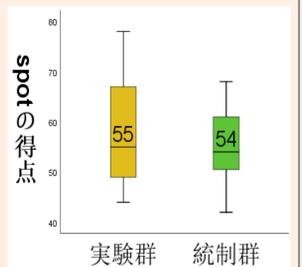
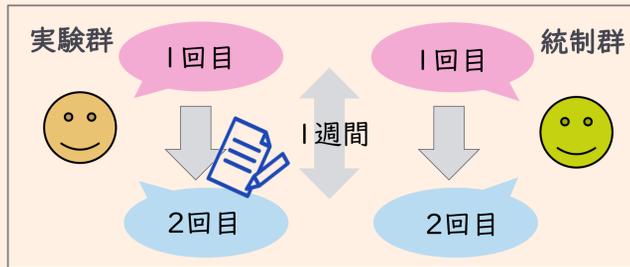
■ 作文を書いたという経験の有無は、発話量と頻出語の内容に影響を与えていた。  
(1) 発話量では、特に語の多様化に影響を与える。  
(2) 内容では、身近な話題から抽象的な話題へと変化させるような影響を与える。

## 研究背景

■ 言語運用力の重要性が高まっているが、海外の学習環境では、以下のような問題がある。  
(1) 「話す」機会を十分に提供できない。 (2) 十分なフィードバックが与えられない。  
■ 「書く」行為と「話す」行為は表現という面で近い関係にあり、その二つが連携する活動は、効率よく書く力を伸ばすことができる(石黒2014:58-65)。  
■ 「書く」活動を「話す」活動のなかにうまく取り入れることで、「話す力」を伸ばすこともできるのではないか。  
➡ 「書く」活動が発話の産出(アウトプット)にどのような影響を与えるか

## データ

■ ドイツ国内の初級から中級レベルの学習者32名をオンラインによる客観テストのSPOT(小林2015)の結果と学習歴をもとに実験群(17名)と統制群(15名)に分ける。  
■ 以下の(1)~(3)の方法で発話のデータを収集した。  
(1) 「住みやすい国の条件とその理由」について、時間制限を設けず、自分の考えを日本語で話せるだけ話す。  
(2) 実験群のみ、一週間以内に同じテーマで作文を書き提出する。  
(3) (1)の一週間後、再び同じテーマで1回目と同様、時間制限を設けず、日本語で話す。  
(ポイント1) 課題はドイツ語で提示した。  
(ポイント2) 話すときはリソースの使用を認めていない。  
(ポイント3) 書くときはリソースの使用を認めている。  
(ポイント4) 2回目に同じテーマで話すことは事前に知らせない。  
(ポイント5) 発話は録音し、文字化した。  
(ポイント6) 二つのグループの得点に有意差はない( $t(30)=.853, p=.40, r=.15$ )。



## 分析1: 発話量の比較

(1) データをUniDicと形態素解析エンジンのMeCabを用いて、短単位に区切る。  
(2) 延べ語数、異なり語数を計算し、SPSS ver.25によるt検定(有意水準5%で両側検定)を用いて各グループの1回目と2回目の発話量の有意差の有無を確認する。

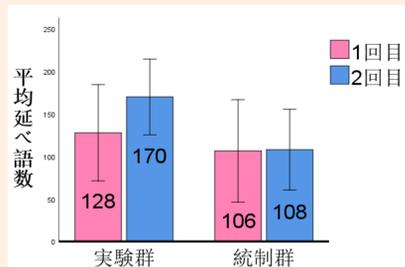
## 分析2: 特徴語の比較

■ KH Coder Ver.2.00f(樋口2014)を用いて、対応分析を行い、それぞれの発話に出現する語の特徴が作文の有無、1回目と2回目でどう異なるのかを分析する。

## 結果1: 発話量の比較

### 【延べ語数】1回目と2回目の平均延べ語数の比較

実験群では、有意な傾向が示され、統制群では、有意な差が認められなかった。

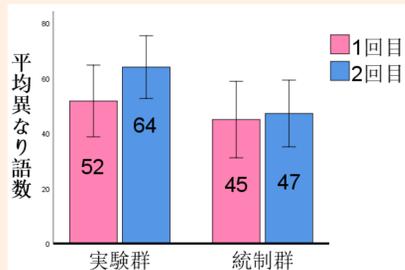


実験群:  $t(16) = 1.95, p = .07, r = .44$   
統制群:  $t(14) = .10, p = .92, r = .03$

図3 平均延べ語数及び標準偏差

### 【異なり語数】1回目と2回目の平均異なり語数の比較

実験群では、有意な差が認められ、統制群では、有意な差が認められなかった。

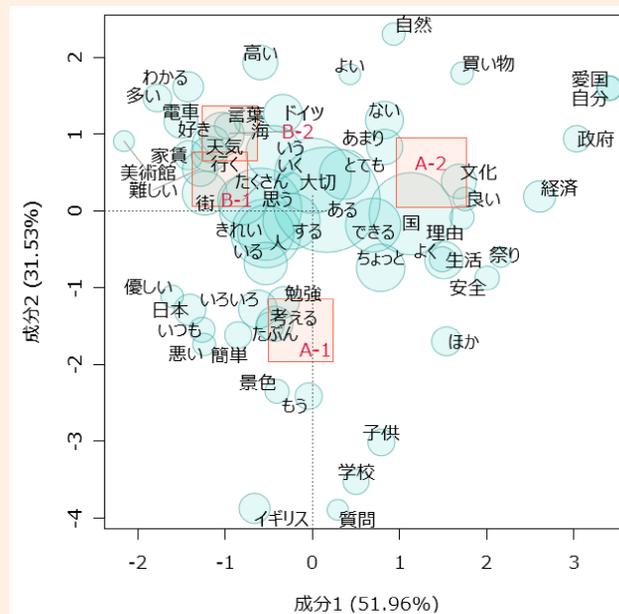


実験群:  $t(16) = 2.26, p = .04, r = .49$   
統制群:  $t(14) = .54, p = .6, r = .14$

図4 平均異なり語数及び標準偏差

## 結果2: 特徴語の比較

(1) 実験群(A-1, A-2)は互いが離れたところに位置していることから、頻出語の特徴が似ていない。  
(2) 統制群(B-1, B-2)は互いが接近していることから、頻出語の特徴が似ている。  
(3) 実験群は、2回目に「政府」「経済」「安全」などやや抽象的な語が出現する。



A: 実験群(作文有)  
B: 統制群(作文無)  
1: 1回目の発話  
2: 2回目の発話

図5 2回の発話と作文の有無による対応分析の結果

## まとめと今後の課題

本研究では、書く活動を加えることで、発話時の語彙力に影響があることが確認できた。今後の課題として、1) 正確さ、内容の深さなどでどのような影響があるのか、2) 授業にどのように加えていくかを検討、検証しながら、「書く」と「話す」を連携した活動が、総合的な産出能力の向上につながることを示していきたい。

### 【参考文献】

石黒圭編(2014)『日本語教師のための実践・作文指導』くろしお出版。  
小林典子(2015)「SPOT」李在鎬編『日本語教育のための言語テストガイドブック』pp.110-126, くろしお出版。  
樋口耕一(2014)『社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指して』ナカニシヤ出版。  
水本篤・竹内理(2008)「研究論文における効果量の報告のために—基礎的概念と注意点—」『英語教育研究』31 関西英語教育学会pp.57-66。

### 【注】

効果量では、サンプル・サイズによって変化しない、標準化された指標である実質的な差を示すことができる。検定では効果大:  $r = .50$ , 中:  $r = .30$ , 小:  $r = .10$ が基準である(水本・竹内2008)。